

世界の南限、南アルプスのライチョウ

朝倉俊治（静岡ライチョウ研究会）



総会記念講演「世界の南限、南アルプスのライチョウ」

ライチョウ (*Lagopus muta*) は、主に北極周辺のツンドラ地帯に分布し、日本が世界の最南端です。日本のライチョウは地球の寒冷化に伴い日本列島に入り分布を拡大し、その後中部山岳の高山帯に残ったといわれています（中村, 2020）。最近の研究では日本のライチョウは、最終氷期の初め（7～4 万年前）に大陸から分かれたと考えられています（西海, 2020b）。また日本の南アルプス集団は、国内の他集団からほぼ 1 万年前に分かれたと推定されます（西海, 2020a）。

日本のライチョウ (*Lagopus muta japonica*) はキジ目キジ科ライチョウ属に分類されています（日本鳥学会, 2024）。ハトよりもやや大きい全長 350～378mm で、体重が 430～550 g です（岩見, 2020）。ライチョウは高山環境に適応し、多くの鳥類が年 2 回換羽するのに対して、年 3 回換羽（夏羽、秋羽、冬羽）します。夏羽の雄は上面が黒褐色で下面は白です（写真 1）。雌の夏羽は上面がほぼ茶褐色のまだら模様で下面が雄同様に白です（写真 2）。冬羽になると雌雄ともに全身が白くなります（写真 3）。ライチョウは一夫一妻で、雄が繁殖期になわばりを守ります。雌はハイマツの下で約 6 つの卵を産み、雌のみが抱卵します。卵はおよそ 22 日後の 7 月上旬ごろ孵化します。雛は孵化したのち母親と巣を離れ、母子群で過ごします（写真 4）。ライチョウの主な食べ物は一年をとおして高山植物です。雛は孵化



写真 1 雄の夏羽



写真 2 雌の夏羽

してから親の糞（盲腸糞）を食べることで腸内細菌を獲得します。腸内細菌は高山植物に多く含まれる有害成分を分解する役目をはたします（岩見, 2020）。孵化後母子群の父である雄は、子育てには参加せず、なわばりも守らなくなります。

静岡ライチョウ研究会は、1997 年よりライチョウの世界最南限分布地で調査を続けています。世界最南端の繁殖地は長野県、静岡県境にある南アルプス南部イザルガ岳（標高 2,540 m）です（田嶋, 1985）。そこから北へライチョウの生息する県境の稜線は亜高山帯針葉樹林を挟みながらハイマツ群落が島状に分布する仁田岳（標高 2,524m）、茶臼岳（標高 2,604m）、上河内岳（標高 2,806m）と続きます。1997 年に調査を開始したころは、同じ山岳で毎年



写真3 冬羽（左雄、右雌）



写真4 母子群（坂本森人氏撮影）

目撃できるライチョウが同一個体なのか疑問でした。ライチョウは特別天然記念物（文化財保護法）、国内希少野生動植物種（種の保存法）などとして厳重に保護されているため関係機関の許可を得て2007年から足にカラーリングを装着し個体識別を行いました。その結果、他の地域同様に南限のライチョウも同じ場所に同じ雄がなわばりを持ち、ほぼ同じ雌とつがいになり定着していることがわかりました。また、ライチョウは生まれた年の秋に雌親から独立し翌年の繁殖までに生まれた場所から分散します。その分散距離は雌雄で異なり、雌のほうが雄よりも遠くに分散することが知られています（小林, 2020）。南限地域での雄の分散は、これまでに2例確認されており、上河内岳北から茶臼岳南の2.8km（分散距離）と上河内岳北から仁田岳の約3.9kmでした。一方雌の分散はこれまでに3例確認されており、約31.6km（間ノ岳→茶臼岳）、約39.8km（仙丈ヶ岳→上河内岳）、約31.5km（北岳→上河内岳）とすべて南アルプス北部からの長距離分散でした。このほか調査を続けると南限のライチョウ雄には繁殖期と非繁殖期に季節移動しながら過ごしている個体がわかりました。繁殖期になわばりをイザルガ岳や仁田岳で持った雄は非繁殖期により北の山岳へ移動します。このような事例は複数確認されており最南端分布地の特徴です。

定期的調査を続けている山岳のなわばり数はイザルガ岳で1から2なわばり、仁田岳で1なわばり、茶臼岳で2から4なわばりとなっています。これら山岳のうちイザルガ岳と仁田岳はなわばりができる年とできない年がありますが、茶臼岳以北では調査を実施した年

には必ずなわばりを確認できています。最南限のイザルガ岳では、2016年から2018年に1なわばりが確認されましたが、この2018年を最後に最近はなわばりが6年確認できていません。イザルガ岳のなわばり消失はどうしてなのでしょう。生息環境となるハイマツ群落や風衝草原には景観的に大きな変化はみられません。だとすると、近隣山岳からの分散雄の減少や南アルプス北部からの数十キロに及ぶ雌の長距離分散減少が原因かもしれません。はたまた捕食者による影響や孵化して2～3か月の雛の生残率の悪化なのか。疑問は尽きません。

引用文献

- 岩見恭子（2020）ライチョウの体. 神の鳥ライチョウの生態と保全：23-27, 緑書房.
- 小林 篤（2020）標識調査から明らかになったライチョウの適応進化と保全に向けた課題. 生物の科学遺産, 74 巻 2 号：170-179.
- 中村浩志（2007）ライチョウ *Lagopus mutus japonica*. 日本鳥類学会誌, 56 巻 2 号：93-114.
- 中村浩志（2020）世界のライチョウ類と日本のライチョウ 分類と生息環境. 神の鳥ライチョウの生態と保全：16-19, 緑書房.
- 日本鳥学会編（2024）日本鳥類目録改定第8版, 一般社団法人日本鳥学会.
- 西海 功（2020a）ライチョウの保全遺伝学. 生物の科学遺産, 74 巻 2 号：166-169.
- 西海 功（2020b）遺伝子解析により解明されたライチョウの系統分化. 神の鳥ライチョウの生態と保全：20-22, 緑書房.
- 田嶋一善（1985）世界南端のなわばり（ライチョウ）. 続々野鳥の生活：103-107, 築地書館.